

第一章 真つ白な地図

1

その夜の始まりには、地図はまだ空白で、約束された流血沙汰は、ひとつだけしかなかった。そこで死にゆく者の名も決まっております、すべては予定の行動、予定の運命にのっとり、変更の余地はないように見えた。

螺旋状の通路を降りて、関沼慶子は慎重に車を走らせていた。「東邦グランドホテル」の専用駐車場は、建物の地下一階と二階に位置している。六月二日大安の日曜日の宵、空いているスペースを探すのは、かなり骨が折れた。

なんとか車をおさめたとき、右手に見える宴会ロビーに直通のエレベーターから、数人の若い男女が降りてきて、慶子の方へ歩いてきた。盛装して、「寿」の文字の入った大きな紙袋をさげている。女性の一人は、華やかな振り袖姿だが、見るからに歩きにくそうで、頭にさした

豪華な髪飾りが、危なっかしく揺れている。今にも落ちてしまいそうだ。

運転席のドアを開け、慶子が降りると、傍らを通りすぎようとしていた若者が、意外そうに眉を吊り上げて言った。

「あ、ベント」

すかさず、仲間たちが冷やかした。

「田舎もんだなあ、おまえ」

「ベントがめずらしいのかよ？」

笑い声ははじける。慶子は彼らに向かって軽い笑みを投げ、車の後部へと向かった。細かい襷を寄せたジョーゼットのワンピースの裾がひるがえり、足首にまつわりつく。ハイヒールの踵が、コンクリートの地面を打って、高い音をたてた。

車のトランクを開けると、火薬の匂いがした。

おかしなものだと、慶子は思った。ここ二週間ほど、射撃場には行っていない。

毎夜のように銃を取り出しては、決心が鈍っていないことを確かめてはいたけれど、撃ってはいなかった。この火薬の匂いは、どこから来るのだろうか。

さっきの若者たちは、慶子のいる場所から車を四台隔てた区画にいた。大型のヴァンの後部座席に荷物を積み込んでいる。にぎやかな声が聞こえる。慶子がそちらを見やると、さきほど「あ、ベント」と声をあげた若者が、またこちらを見ていた。視線が合うと、はにかんだよう

な顔で笑った。

「カッコいいツね」

貸衣装屋からそのまま直行してきたような身形だが、黙っていればそれなりに様になつてゐる。が、しやべると台無しだった。人の良さそうな下がり眉毛の笑顔に、蝶ネクタイがまったく釣り合つていない。

「ベントツ、めずらしい？」

慶子が尋ねると、若者は、少し気を悪くしたような表情を浮かべた。仲間にかかわれる分にはかまわないが、赤の他人の女に冷やかされるのは我慢ならないというわけか。通りすがりの女は、自分が声をかけたなら、みんな優しい笑顔だけを返してくれるべきだというわけか。馴れ馴れしさと傲慢さのいり交じつた、おかしな習癖。

「メルツエデス・ベントツはめずらしくないけど、女の人が190E23のオーナードライバーになつてるのはめずらしいですよ」

若者が、「メルツエデス・ベントツ」と発音するのを聞いて、慶子はちよつと微笑んだ。

「主人の車なの」

そう、言つてやると、蝶ネクタイの若者はやつと離れていった。慶子はトランクから荷物を出した。

黒い革製のケースだった。縦九十センチ、横三十センチ弱、厚みが十五センチ程度だ。角々

が金属で補強してあり、留め金には鍵がついている。一見したところ、楽器ケースのように見える。事実、今まで、これをさげているとき、「それは何ですか？」と尋ねられたことはないが、「その楽器は何ですか？」と尋ねられたことは何度もある。

そのたびに、慶子はいつも、おかしくなる。質問をした相手を笑うのではなく、こういう趣味を持つている自分を笑うのだ。不釣り合いな、らしくないことばかりしたがる慶子。子供のころからそうだった。

ケースの自身は、銃身長28インチ、口径が12番の上下二連銃だった。競技専用の散弾銃だが、運搬するときは、銃身、先台、元台の三つの部分に分解してケースに納めてあるので、何も知らない人の目には、そんな物騒なものだとはわからない。かなり注意力のある人間が、(楽器にしては、大きさのわりに、ずいぶんと重そうだな)と感じる程度だろう。

取り出したケースを足元に置き、トランクの蓋を閉める。装弾の方は、マンションの部屋を出るときに、シオルダーバッグの底に、ハンカチに包んでおさめてきた。そのバッグの細い革のストラップを右肩にかけなおし、ケースを持ちあげて、エレベーターの方へと歩きました。

もちろん、日ごろ射撃場に通うときには、弾をバッグに入れて歩くような危ない真似はしなかった。今夜は、たった一発しか必要ではないから——そして、その一発を撃つてしまえば、もう全てが失くなってしまふから、だからそうしてきたのだ。

エレベーターホールには、人気がなかった。がらんとして、妙にまぶしい。慶子は顔をしか

め、エレベーターのボタンを押すと、壁にもたれて、待った。迷いはもうなかったが、兄のとだけは、ふと考えた。
 (こめんね)と、初めて思った。

今から二年前、慶子が射撃を始めたと言い出したとき、狩猟を趣味にしている故郷の兄は、条件を三つ出してきた。ひとつ。ちゃんとした射撃場のクラブ会員になること。ふたつ。車をベンツかボルボに買い替えること。三つ。その車に、弾を紙ケースごとすっぽり納めることのできる、緩衝材かんしょうざいのきいた専用の小物入れをつけること。

「もともとおまえは、気紛れなくせに、言い出したらきかない方だ。だから、射撃を習うことには反対しないよ。ちゃんと許可をとって銃を持つんだし、クラブにいれば指導員もいる。ただ、射撃場への往復には、どうしても車を使わなきゃならない。それが心配なんだ。箱いっぱい弾を積んで走ってるとき、右折車が横つぱらに突っ込んできたりしたら、どうなると思う？」
 ただ死ぬだけじゃない。死に化粧もしてもらえないくらいひどい有様ありさまになって死ぬんだぞ——仁丹粒にだんりゅうくらいの大ささの散弾が詰まった、プラスチックと真鍮しんちゆうでできた筒を見せながら、兄はそう言ったものだ。テレビの刑事ものや、外国のアクション映画のなかに出てくる実弾——あの流線型の、見るからに飛びそうな形の弾とはイメージが違い、それはちっとも危険なもののように見えなかった。

この続きは、書籍でお楽しみください。

◎注意

本作品の全部または一部を無断で複製、転載、改竄、公衆送信すること、および有償無償に拘らず、本データを第三者に譲渡することを禁じます。

個人利用の目的以外での複製等の違法行為、もしくは第三者へ譲渡をしますと著作権法、その他関連法によって処罰されます。